

图像化された動物
オオカミの表示と形態認識

Animals that Have Become Iconographic Symbols

菱川晶子

はじめに

- ①描かれたオオカミ
- ②語られたオオカミ
- ③オオカミとの接触

おわりに

【論文要旨】

日本列島からオオカミが姿を消して、まもなく1世紀が経とうとしている。しかし、オオカミを見たとの目撃情報は依然として後を絶たず、各地から報告されるシカによる農林被害への対策としてオオカミの再導入案も提示されている。このようなオオカミと日本人とのつながりを明らかにすることは、ヒトと動物との関係性を理解する上で重要である。こうした考えに基づいて、筆者はこれまでオオカミにまつわる民間説話の考察を進めてきた。

本稿では、これまでの伝承資料に加え、新たなアプローチとして図像資料を用いた。これらの資料を通して、ヒトがオオカミをどのような形態として捉え、またどのように表象化してきたのかを考察した。具体的には、そこでの資料を宗教関係、絵画関係、本草学・博物学関係に3分類して考察を進めた。その結果、宗教関係ではオオカミの強靭さや神秘性を誇張する傾向が認められ、絵画関係では写実的に描かれると共に美化する要素が加わり、本草学・博物学関係ではオオカミの他に豺（山犬）の姿も併せて描かれ、また描き分けられていることがわかった。時間的な流れとしては、強靭で神秘的な存在としての「狼」が初めに存在し、少し遅れて実在の動物としてのオオカミが認識されるようになってくる。さらに本草学の「豺狼」を通して、実際とは異なった形態認識も持たれるようになったことがわかった。

一方伝承資料では、オオカミの口の大きさ、眼光、毛色が表象化されていること、さらに、オオカミの形態に関する伝承が少ないと想定して、オオカミとの接触時の状況、また、明治時代以降の『尋常小学修身書』巻1（第2・3・4期）に描かれたオオカミの挿絵の存在を指摘した。